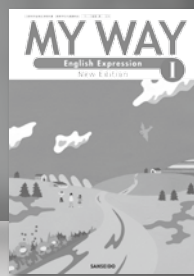


『MY WAY English Expression I New Edition』 —より分かり易く、使い易く、活動的に—



同志社女子大学 飯田 毅

はじめに

『MY WAY English Expression I』の編集方針は、生徒一人ひとりが言語能力と言語感覚を磨き、明確な論理展開の方法と表現力を培い、将来、諸外国の人々とコミュニケーションが取れ、ひいては親密な人間関係を築いていける態度を育成することにあります。今回の改訂にあたり、その編集方針を継承し、さらに内容を充実させることにしました。改訂の特徴を以下3点にまとめることができます。

- (1) 文法説明を工夫することで、生徒が英語の仕組みを理解し、英語と日本語の表現の共通点や相違点に気づくようにする。
- (2) 先生と生徒にとって、本書をより使い易くする。
- (3) 生徒自身の活動的な言語活動を支援する。

本稿では、その改訂のポイントを中心に説明し、現行版から引き継いだ点についても改めて述べます。

3つの改訂ポイント

1. 分かり易い文法説明、言語の仕組みに気づく

外国語で表現できるためには、まず外国語の仕組みである文法を理解する必要があります。往々にして、生徒は文法に対して苦手意識を持っています。生徒にとっては、確かに英語の文法は難しく思えるのかもしれませんが、しかしながら、英語の文法規則が日本語より複雑で、数が多いと言うわけではありません。むしろ、生徒がそのように感じるのには、日本語という母語の文法を無意識のうちに身につけているために、外国語の文法を意識的に学ぶことが複雑に感じられるためではないでしょうか。通常、子どもは母語の文法を小学校以前に身につけますが、無意識に身につけた母語の文法を説明することはできません。外国語学習の長所として、外国語を意識的に学ぶことで、その言語の仕組みを理解できることが

あります。その発展として、無意識に身に付いた母語の仕組みも理解できるようになります。近年の英語教育の問題の一つに、いたずらにコミュニケーションを重視するあまり、生徒が外国語の仕組みを理解する重要性が誤解され、ただ単に意思が通じればよいという短絡的な考えが流布している点があります。

本教科書では、初版から上記の問題点を鑑み、生徒が英語の仕組みを分かり易く理解できるように配慮してきました。今回の改訂では、理解がさらに深まるように分かり易く説明し、生徒自身が英語の仕組みに気づけるように工夫しました。その代表例を順に取り上げて説明しましょう。

本教科書では、Lesson 1の前にGet Ready!があります。この課の目的は中学校英語から高校英語への橋渡しです。改訂版では、この課を①英語の基本的な要素と②英語の基本的な語句の並べ方の2つに分け、「英語の冠詞の基本」と「英語の語順の基本」を新たに加えました。「英語の基本的な要素」では、冠詞の基本を新たに取上げています。定冠詞theの理解は、生徒には難しいという理由で、中学校ではその本質的説明を避けられる傾向があります。確かに、細かく見ると、様々に分類される冠詞の用法をすべて教科書で取り上げ、説明するのは不可能です。しかし、本教科書では最も基本的な用法をイラスト付きで以下のように簡潔に説明しています。「話し手と聞き手が特定した名詞にtheをつける」、つまり、話し手と聞き手が特定できた場合はthe dogとなり、特定できない場合はa dogとなる、ということです。この説明は読解の場面において「書き手と読み手の特定した名詞にtheがつく」という説明にも応用できます。即ち、英文を読んでいく中で最初にa dogと出てきた場合、読み手は不特定の犬と理解し、次に同じdogが出てきた時には、読み手は特定できたthe dogと理解するという意味です。この

説明は、他の説明より応用が利く、という点でより汎用的な説明と言えます。本改訂版では、このような汎用的な説明を心がけました。

「英語の基本的な語句の並べ方」では、英語の代表的な5種類の文型の前に、新たに「基本的な英文の作り方」を加えました。日本語の語句の並べ方と対照させながら、英語の基本は、<「～は/～が」+「～する/～である」+「～を/～に」+ (どこで) + (いつ)>、と説明しています。既に中学校で学んできていることですが、生徒が改めて、英語の最も基本的な文の型に気づくことにねらいがあります。

Get Ready!の目的には、生徒が重要な文法用語の意味を理解し、使えるようにすることも含まれています。現行版では、文法を説明する言葉である文法用語の基本を取り上げ、生徒が理解できるように解説しました。改訂版においても、本教科書が取り上げるすべての文法用語の説明を見直し、分かり易く解説しました。主語、動詞、目的語、補語、自動詞、他動詞等の文法用語の理解は、英語能力とは直接関係しません。しかし、英語の仕組みを理解する際に必要不可欠な用語です。また、日本語という言葉を用いるような文法用語を使って捉え直すこともできます。さらに、この用語は、将来、他の外国語を学習する際にも役立ちます。大切なことは、生徒が文法用語を単に理解するだけでなく、生徒が英文を作る過程で、実際に使えるようにすることにあります。このような用語が使えるようになると、生徒は英文を作る過程で自分の英文を客観的に見つめ、分析する力を向上させ、より良い表現に導けるようになります。このような能力をメタ言語能力と言います。私の研究では、メタ言語能力は英語能力と関係してきます。文法用語は英語の文を分析し、正しい表現を導くための道具と言ってもよいでしょう。高校生は複雑な文法用語を知る必要はありません。生徒は本教科書に取り上げられている基本的な文法用語を理解し、自分自身で英文を作る際の道具として使用できるようになることが大切です。適切で基本的な文法用語を身につけることは、メタ言語知識を増やすことになります。メタ言語知識を使えるようになると、分析力が高まり、表現力を向上させる力であるメタ言語能力を伸ばすことになります。私は英語を学ぶ過程の中で、このようなメタ言語知識を増やし、実際に使えるようになることが言語教育の大切

な役割であると考えています。

次に、本課本文中に関して大きく変わった点はPointの扱いです。改訂版のPointでは、目標となる文法事項の説明をできるだけ短く、文法事項の本質をできるだけ分かり易く説明しようと心がけました。例えば、Lesson 1のPoint 1の説明は、現在時制を扱っています。それを「現在形は、現在の習慣や状態、長期にわたる事実などを表します」と説明しています。この説明は現在形の本質を端的に述べています。ご存知のように、現在形はさまざまな説明が可能です。私達著者は、教室で教える先生にとって、教え易く、そして、生徒が学び易い説明を心がけました。「長期にわたる事実」の例文として、My brother works for a sportswear company. があります。この英文は、「私の兄は、(短期間ではなく長期にわたり)スポーツウェアを作る会社で働いている」という意味です。この長期をさらに拡大していくと、The Olympic Games take place every four years. 「オリンピックは、4年に一度開催される」という「一般的事実」になります。さらに長期を拡大していくと、本書では扱いませんが、The sun rises from the east. のような「真実」という分類に至ります。この「真実」という分類は「長期にわたる事実」の分類に含まれます。言い換えれば、後者の方が、より汎用的な説明であると言えるでしょう。このように、一つの文法事項についてさまざまな説明が可能です。本改訂版では、できるだけ高校生が文法事項の本質を理解できる汎用的な説明を心がけました。この説明と授業での先生の説明を通して、初めて生徒は英語の文法に興味を持つようになるでしょう。もちろんPointの説明がすべてうまくいったわけではありません。一例として、紙面の制約により、助動詞の課ではPointの解説の中だけでは本課で扱うすべての助動詞の意味を説明できません。この点については、教室で先生の説明にお願いせざるを得ません。

最後に、生徒が英語の仕組みに気づくことができるように、現行版のGrammar for Communicationに加えて、改訂版では、Appendixに日本語と英語の表現の違いに関するコーナーを設けました。英文法を学んで行く過程で、生徒は英語と日本語の関係を機械的に捉えてしまう傾向があります。そこで、高校生が犯し易い誤りを短くまとめました。「語彙編」と「表現編」の2つに分けられ、生徒は実際に問題を解きな

がら学べます。語彙の例を取り上げてみましょう。英語では通じないカタカナ語(例: コンセント、マンション)や使い方が異なるカタカナ語(例: サイン)が取り上げられています。いずれも、一般の人も誤解しやすい代表的な例です。日本語と英語では言い方が異なる例として、濃いコーヒー(strong coffee)があります。表現編には、日本語では主語が省略される場合、日本語とは違う語句を主語にする場合、そして、無生物主語の場合が挙げられています。いずれも身近な例です。このような英語と日本語の基本的な表現の違いを学ぶ中で、生徒は両言語に対する意識を高め、言語そのものに対する興味を持つようになるでしょう。

2. 暗誦し易い例文と練習問題

上記の文法事項の説明とともに改訂の大切な要素が、実際に使われる例文の見直しです。今回の改訂では、生徒の記憶に残り易いようにすべての例文を見直し、生徒にとって難しそうな文の語句は書き換え、良質な文を提示しました。現行版では、当初生徒が例文を読んだ時に、内容をイメージし易いように心がけました。その結果、やや長い英文も含まれてしまいました。教室では、生徒はこの例文を何度も読み、時には暗誦します。その際、何の文脈もなく無意味な文を覚えるほど生徒にとって辛いことはありません。改訂版では、生徒が遭遇すると思われる日常的な場面を想定し、発音し易い単語を使い、可能な限り短い英文にしました。

現行版の時から本教科書では、生徒が例文を覚え易いようにレッスンごとに話題(topic)が設定されています。一例を挙げると、Lesson 1ではスポーツが話題になっています。話題によって例文一文ごとに緩やかな背景が与えられ、生徒が暗誦する際に記憶に残るようになります。話題はこの課全体の文脈に相当するものだと言っても良いでしょう。明確な文脈をもった文章は、Grammar in Useで扱われています。生徒は設定された日常の話題の中で良質な例文を音読しながら、記憶に留めることができます。

練習問題に関しても一文ずつすべてを吟味し、文法事項との関連を見直しました。全体の練習問題の数も増やしました。日本語を参考にして英文の空所を補充する問題では、本教科書を使う生徒にとって、難しいと考えられる語彙については英単語をヒントとして与えました。

3. より活動的に

本教科書では、従来から各Lessonの最後にUse!というコーナーを設け、実際に生徒自身が英文を作り、使えるように設計されています。Use!は、生徒自身が目標となる文法事項を使って、自己表現する場です。Use!で生徒が作る英文は、基本的に単文です。ペアでのやり取りも一回だけです。文法事項は実際に発話せずに頭で理解することができます。しかし、生徒が使えるようになるためには、生徒自身が伝える内容を考え、英文を作り、その英文を発話する体験が必要になります。また、教師は生徒の作った英文を読むことで、目標となる文法事項の理解度を確認し、再度指導することができます。このような循環を通して、教師は生徒の理解度を向上させ、正しく使用できるように援助できます。

改訂版では、このUse!に加えて、巻末にCommunication Activity集を設けました。このActivityの目的は、生徒のコミュニケーション能力の基礎を培い、複数の文法事項を使って、生徒同士が複数回のやり取り(interaction)をすることにあります。この活動はすべて対話形式です。クラスメートと英語を共に学ぶという協同学習のねらいもあります。ただ単に対話するだけでなく、最後にその対話を報告(reporting)することで、教師は生徒の活動状況をモニタリング(monitoring)し、生徒の文法事項の理解度に応じて補足修正できるというフィードバック(feedback)機能を持たせています。

本教科書は、1) 時制、2) 助動詞・受動態、3) 不定詞・動名詞・分詞など、4) 比較・関係詞、5) 仮定法・話法の5つのUnitがあります。このCommunication Activityは、ひとつのUnitに2つのActivityが用意され、全部で10あります。ここでは、今までのLessonで学んだ文法事項を活用して、総合的な言語活動を行います。言語活動は対話が基本となり、information gapを使った活動、ペアで対話を発展する活動、interviewしながら生徒同士を知る活動等に分かれています。

Communication Activityの一例を取り上げて説明しましょう。Communication Activity 1はinformation gapを利用したペア活動です。最初の指示文には「表には、Erica, Kate, Shelly, Kenが先週末にしたこと、現在していること、今度の土曜日に予定していることが書かれています。この表について、情報交換し

よう」と書かれています。その下に、Model Dialogと表があります。最後に「3人のうちの誰かのスケジュールをクラスで報告しよう」という指示が書かれているReportingがあり、生徒は下線部に英語を書き入れ、複数の英文を完成します。この活動には、現在進行形、過去形、未来表現の文が含まれています。

生徒は中学校で経験しているため、この種のActivityに親しんでいることでしょう。しかし、中学校と大きく違う点は、文法事項を体系的に学んだ上で、活動している点です。やり取りを楽しむことばかりでなく、英文を書くことにも重点があります。また、活動を通して、再度、文法項目を復習することも大切な点です。

教室活動を活発にさせるためのもう一つの工夫が、英語を使って活動できるように、Lessonの中のCheck、Grammar in Use、Exerciseの指示文やReview Exerciseの指示文を易しい英語にしたことです。生徒が無理せず理解できる範囲の中での最低限の英語の指示文の書き換えです。本教科書には、総合的な言語活動を目指すProject Workがありますが、その指示文については日本語のままです。これは生徒に無理な負担をかけずに、英語を使った活動を援助するための工夫です。確かに英語の指示文だけでは、英語を使った理想の授業とは異なるかもしれません。しかし、先生がこの指示文を読むだけで、その最低限の目的を果たす役目があります。本教科書の表表紙の裏には、教室で役立つ表現として、Classroom Englishの例があります。それらの表現を合わせて使うことで、英語を使って活動できるようになります。

最近、とかく英語教育の中で「英語の授業は英語で」という語句が、スローガンのように言われています。旧来の英語の授業を変えようとする強い意志の現れと理解できます。言い換えると、「目標言語を使って目標言語を指導せよ」となります。この指導法に関して、世界中でさまざまな研究成果が出されていますが、生徒に良い影響を与えるかについて必ずしも明確な結論が出ていません。むしろかなりの問題点も指摘されています。特に「表現」に関しては、生徒が表現の基礎となる文法事項を理解することを考えると、すべて英語で行うことは、文法という抽象的なことを理解できない可能性があるという点で、危険とも言えるでしょう。むしろ生徒の実態に合わせながら、先生の教室言語使用計画(Classroom Language Planning)

に従って、意図的かつ計画的に行うことが大切です。言語計画(Language Planning)とは、危機に瀕した言語を復活(revival)させるために、言語を意図的・計画的に使用することです。それを教室に応用したものがClassroom Language Planning (CLP)です。CLPを一言で言えば、外国語を生徒が教室内で使えるようにするために、どの場面でのどのように使わせるかを計画し、実行することです。1時間の授業内の英語使用計画ばかりでなく、次の時間、数週間、学期、年間の英語使用計画を含んだ総合的なものです。このCLPはWalesにおけるbilingual教育の中で、Translanguagingという名前で実施されています。紙面の関係でここでは詳しく述べられませんが、別の機会に指導書等で扱えればと思います。

変わらぬ特徴

上記の改訂に加えて、本教科書の変わらぬ特徴に関して、3点簡単に紹介しましょう。最初は、5つあるUnitの扉です。それぞれのUnitで扱う文法事項の要点を分かり易くまとめてあります。イラストとともに、Unitの中で扱う重要なポイントを興味深くまとめました。Unit1の最初は「時」と「時制」を区別しよう、になっています。現実の時間と文法上の時間が異なることを示しています。また、Unitの最初にはこの課で扱う学習目標も書かれています。次に、Unitの最後にあるReview ExercisesにあるWrite a Paragraph!です。ここでは自分自身のことについて、3つの英文で最低限のparagraphを書きます。Use!やCommunication Activity同様、自己表現の練習です。これが『MY WAY English Expression II』のparagraph writingに繋がります。まとまりのある英文を書くことで、英文を書くことに慣れ、生徒の論理性を伸ばします。最後がProject Workです。ここでは学習した文法事項に関係なく、総合的に言語活動する場です。4技能を伸ばすことが目的です。

以上、本改訂版の特徴を短く「より分かり易く、使い易く、活動的に」とまとめることができます。本書はすべての例文を生徒の観点から見直し、汎用的な文法説明を心がけ、生徒のメタ言語能力を伸ばしながら言語に対する気づきを促し、CLPを考慮しながら言語活動を重視した改訂版です。このような編集方針のもとに作成された改訂版が、生徒たちの言語表現力の育成に寄与できますことを願ってやみません。